

発達障害児の主体的な活動参加の支援（2）

—「話し合いカード」を用いた自己と他者の好みをふまえた活動選択と言語化の関連性—

○中内麻美

竹森亜美

大石幸二

（立教大学心理芸術人文学研究所）

（立教大学心理芸術人文研究所）

（立教大学現代心理学部）

KEY WORDS: 発達障害 活動選択 言語化

問題

自ら語ること（言語化）は、行動の調節に積極的な役割を果たすことが知られている（Jones, 2003; Wessberg, 1990）。多くの場合、発達障害児は周囲の状況や私的事象の言語化の難しさがあり、とくに知的障害児においては言語表現の拙さ・非流暢性ととも受動的傾向が指摘されている（橘, 2001）。また、手がかりが少ないときや逆に多いときには周囲の状況に見合った行動をとることが難しいとされ、活動の手がかり（松下・園山, 2013）や自己ルール（岡村・渡部・大木, 2009）を視覚化することにより行動調節が促進されると考えられる。本研究は、発達障害児の主体性を重視した支援方法として、言語化の機会と「話し合い表」による活動選択の支援効果について検討した。

方法

対象児 公立中学校知的障害特別支援学級に在籍する2年生女児1名（以下、A児とする）。主たる障害は知的発達症とされ、対人関係においては親和性が高く、相手の様子をみながら行動する傾向があった。他者からの指示に従って行動することはできるが、状況に合わせて自分で判断し行動することが支援ニーズの1つとして挙げられていた。

期間・場面 X年9月からX+1年2月の間の計7セッションを対象とした。各セッションは、本児と研究者および大学院生・学部生を含めた6名のスタッフにより構成し、50分間の指導をB大学内の多目的室にて実施した。本研究の対象である話し合いの場面は、小集団活動のゲーム選定（4つの活動のうち1つを選定）を目的として約10分間設定した。なお、本研究の計画と実施については、B大学心理学研究倫理委員会の審査と承認（承認番号 16-01）を得た上で行われた。

行動観察によるアセスメント アセスメントでは、話し合いにおいて情報の視覚化は行わず、活動に必要な用具のみを提示し、スタッフと自由に話し合うこととした。その結果、行動の系列化が短く抽象度が低い課題に対しては状況に見合った発話ができている（Table1）。したがって、話し合いの際に、スタッフの発言や課題内容の説明はできるだけ短く具体的に行うこととした。

Table 1 話し合い場面におけるアセスメント

課題の特徴		A児の発話	課題レベル
行動の系列化	抽象度		
長い×	高い×	わからない	困難
長い×	低い○	直観	複雑
短い○	高い×	視覚的特徴	苦手
短い○	低い○	適切	できる

標的行動 自己と他者の得手不得手や好みをふまえた選択として、「好き」「得意」の意見が多い活動を選択することを標的行動とした。評価点は、自己・他者いずれか一方の好みによる選択を0点、プロンプトによる状況に見合った選択を1点、自発的な（プロンプトなし）状況に見合った選択を2点とした。加えて、選択理由の言語化と話し合い中の発話内容について整理した。

手続き

ベースライン期: 発言内容を「好き」「嫌い」「得意」「苦手」に分類したシールを「話し合い表」に貼り、意見を視覚化した。4つのうち1つのゲームをA児が選択した。また、選択理由の言語化の機会を設けた。**介入1期**: ベースラインの手続きに加えて、「話し合い表」に「集計欄」を設けた。みんなで楽しくできるゲームを選ぶにはどうしたらよいかと訊くと、A児は「好き（と言っている人）が多いもの（ゲーム）がよい」と答えていた。したがって、「好き」「嫌い」「得意」「苦手」の意見数を表に書き込むこととした。**介入2期**: 「話し合い表」を個別シートに変更した。各自がシールを貼り終えてから個別シートをつなぎ合わせて、A児が発言の集計を行い、活動を選択した。

結果

ベースライン期は評価点0点（自分の好みによる選択）であった。介入1期では、「集計表」を導入したことで状況に見合った選択が可能となったが、選択の際にプロンプトを必要としたことから評価点1に留まった。介入2期では、自発的な選択が可能となった（Figure1）。また、状況に見合った選択が可能になることに伴い、活動選択の理由および話し合い中の発話内容にも変化が見られた（Table2）。

考察

「話し合い表」により、意見を視覚化することで、状況に見合った選択が可能となった。一方、他者の意見を「話し合い表」に視覚化して話し合う過程で、自己の意見との違いに葛藤が生じ、発言および選択を躊躇することがあった。個別シートにより、自発的に発言し、選択することが可能となった。ゆえに、話し合いの最中には、他者の意見の視覚化は自発を阻害する要因となることが示唆された。選択理由の言語化は選択内容と一致しており、活動選択と言語化の関連性が伺えた。話し合いでは、事実を捉えて理由を自発的に言語化することが増えた。自発的な言語化が可能となることは、状況の認識が明確になるとともに主体的な行動につながると考えられた。

Table 2 選択理由の言語化と話し合い中の発話内容

フェイズ	選択理由の言語化	発話内容
BL	たのしいから	同意、私的経験
介入1	得意な人がいっぱいだから	同意、質問
介入2	みんなでできるから	同意、予測

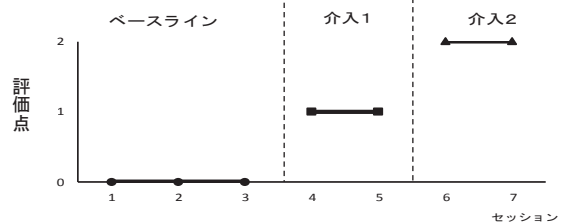


Figure 1 「話し合い表」を用いた活動選択

付記 本研究は、博報財団「第12回児童教育実践についての研究助成」により予備研究として実施された。ここに記して謝意を表する。

(NAKAUCHI Asami, TAKEMORI Ami, OISHI Kouji)